

---

# とある異能と死龍の末裔

山寺獄寺

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある異能と死龍の末裔

### 【Zマーク】

Z0483Z

### 【作者名】

山寺獄寺

### 【あらすじ】

『夜の女神に愛を捧ぐ』の番外編。

皆は既にいなくなつた。不死というのも案外つまらない。  
ならば新たな世界というのに飛び立つてみよつか……

## 異端者の記録（前書き）

かなり短いです

思い出すのはある男との会話。もう数十年も昔の話だ。

薄暗い一室。数多の薬品の混じり合った独特な匂い。病院の様な清潔感は欠片もなく、あるのはなんだ実験の残滓のみ。

「君の不死性は非常に面白い」

そんな言葉から彼のオペラは始まった。

「本来、不死を概念的に説明するなら『生きているのに死ない』というものだ。けれど君の不死性はまさに対極に位置する。言葉にするなら『死んでいるのに生きている』のや」

彼は愉悦に顔を歪める。玩具を『えられた子供のような純粋な嗤い

「理解できるかい？」

不死の定義は『死がない』事だよ。それを君の存在は真っ向から対立しておきながら行き着く現象は同じなんだ。

本当に興味深い 今すぐ解剖ツ…

すまない話がズレたね。

君という存在は正にショーレディングガーの猫だ。生きているのか死んでいるのかあやふやだ」

彼は一度言葉を切った。

数瞬の間。躊躇いがちに言葉を紡ぐ。

「君は平行世界からやって来たと言っていたが、私の仮説では『転生』に近い事象だよ。

君は前の世界で『死の魔法』を使つた。

君達の魔法 精靈魔法は必然的に世界の意志が働いている。死のない君が『死の魔法』を使つ。その矛盾を世界は赦さないのさ。分かりやすく言おう。君は前の世界では死んでいるのさ。先程の矛盾を正すために、世界は君という存在を弾き出したのだよ。前の世界からいなくなつた君は前の世界では確かに死んでいる。けれど君は不死だ。

世界から弾き出された君はどうなるか？別の世界に生を受ける。『生を受ける』という表現は正しくないかもしないがね……

そして彼はこう締め括つた。

「もし、君がこの世界に飽きたら、今の仮説を試してほしい」

その時私は死んでいるかもしれないがね、と笑つていた。

## 異端者の記録（後書き）

設定としては『リリィの』から『とある魔術』へと世界移動だと考えてください。

今回は前説的なもののかなり短いですが、これから展開に期待してもらえればと思います。

別れは幾筋もの涙を湛え（前書き）

一ヶ月振りの更新！！

## 別れは幾筋もの涙を湛え

「不老といつモノは存外面白いものではないな……」

仲間達は既にいない。あれからそれなりの年月が過ぎたのだ。それも当然の事だろう。脈々と血は受け継がれたものの当事者たる彼女達は輪廻へと回帰した。それを間近で直視し続けねばならなかつた。

不老とは何か？

不死とは何か？

答えは『停止』だ。周りがどれだけ歩もうとも血らは停滞し、その様子を観測するだけだ。どれだけの事件に巻き込まれようと、ハ神遊馬という人間は主役になれないのだった。観客にはなれても役者としては三流だった。覚悟を決めたつもりだつたが、現実が遊馬の双肩に重くのしかかる。

「 分かつていたつもりだつたんだがな……」

目の前の墓標に手を合わせる。刻名もなれば生年月日等も全く刻まれていらない簡素な造り。彼は、管理局員として死ぬ事を望まなかつた。あくまで自分のやりたいように生きて 死んだ。つい数ヶ月前の事だ。

見渡す限りに広がる青空の下 生前、薄暗い研究所に籠りきつていた男にとつては調度良いだつと遊馬は亡きがらを此処に埋葬した。

「ドクターも喜んでくれると思います」

隣にいた妙齢の女性は薄く微笑を口許に残していた。常に男を支え続けた女性。研究によつて老化を抑えたものの、既に限界を超えていた。もうすぐ彼女も後を追うことになるだらう。

それでも彼女の表情は暗くない。ウエーブの掛かった紫の長髪は風に靡き、愛おしげに眼前の墓標を眺めていた。

「悪いな、最後まで付き合わせてしまった」

「良いのです。私はドクターに付き従う者  
ドクターは最後まで親友である貴方と共に居続けました。  
私はそれを誇りに思います」

ゆつくつと彼女は墓標の元に向かい抱きしめるようにしな垂れか  
かつた。

「それではさよなら、神凪遊馬。ドクターの親友でいてくれたこ  
とを感謝します」

「ああ向こうで笛と幸せに暮らせ、ウーノ。

俺はお前達とは共に逝けないがな」

遊馬はククッと笑う。

そんな遊馬の姿にウーノは一瞬驚いたように口を開き、それから小さく笑んだ。

陰もなく裏もない、可憐な微笑み。

こんな風に言つのは良くないかもしけないが、初めて見た彼女の本当の姿だった。

ウーノはそのまま目を閉じ、穏やかな表情のまま自らの機能を停止させた。

「不死とは本当に詰まらないな

ウーノの最期を看取ると、遊馬はやり切れなさに天を仰ぐ。雲一つない晴れ渡る空。そこを「羽の小鳥が寄り添つよつに飛んでいた。

「本当に詰まらない」

小さく咳いて暖かさの残るウーノの四肢を抱き抱え、墓標のすぐ側に埋めてやる。

『手伝いましょうか』

『いや、これは俺がしなくてはならない事だからな……』

相棒であるノアから念話が届くが、遊馬はそれを断つた。  
彼らは俺の我が儘で今までついて来てくれた。ならば最後ぐらい恩返しをさせて欲しい。その想いが頬を伝い、足元に雲を落とす。  
ウーノの亡きがらを埋め終えると、影の倉庫から一降りのナイフを取り出し墓標に文字を刻む。

『J・S

ウーノ

我が友、此処に安らかに眠る

ナイフを片付け、用意していた花束を備えた。

「お前はこれからどうするつもりだ？」

出来るだけ平静に努めてみたが、どうにもならなかつた。

従者として、相棒として最初から最後までいてくれたノア。遊馬が一言、『一緒に來い』という言葉を言つだけで彼女は当然の如く付き従うだろ。けれど彼はそれをしない。

確証もない世界移動。どのような世界に飛ぶのか分からぬ。なにより遊馬という存在はもちろんノアも異世界にとつては完全な異物だ。それがどのような影響があるのか予測がたたない。

そして

「次世界への世界転移が成功するか分からぬ。何よりお前を連れていくか……」

成功するかもしれないし失敗するかもしれない。この世界に飛ぶ直前に体験した漆黒の坩堝。あれはおそらく“世界の狭間”だ。失敗すればそこにノアを置き去りにしてしまうかもしれない。

「構いませんよ、主……」

それでも、それでも彼女は静かに笑つたのだった。

「私という存在は主に使われてこそそのモノです。これから先、主から離れるつもりもありませんし　主以外の人間に仕えるつもりもありません」

静かにそして確固たる意思をもつてノアはこの世界に生きるのでは無く、『遊馬と共に生きる』事を告げた。悩む事もなく流される事なく、自らの生まれた世界を捨てた。

「主が修羅を進むなら私は主の剣となり戦いましょう  
平穏を望むなら従者として共にあります  
私の名は『ソウルノア』  
主の命を担う方舟です」

いつの事だつたかもつ思い出せない昔、その時と同じ決意を捧げた。その想いを止める言葉を遊馬は持ち合わせてなど、いなかつた。

「俺とともに悠久の旅に付き合つてもらひや、ノア。俺の舵取りは荒い。着いて来れるか？」

口角を二日月に持ち上げ問う遊馬にノアは笑みにて返す。

「ならば、まずはこの世界での俺を終わらせるとしてよ。……

影が音もなく持ち上がり、一筋の凶器を作成する。それは槍　今まで幾度も血を吸い、臓を貫き、命を終わらせてきたソレは単なる魔法から昇華し概念としての呪いを持ちつるにまでになつた。曰く『影骸槍』、光を消し去るその表面には象形文字の様な文様が碧く輝き呪いを成す。

魔力を調節して呪いを沈黙させ、その切つ先を自らの喉へと突き立てる。

「解呪」

吹き出す血飛沫は大地を汚すことなくふわりと舞い、帯状の魔法陣を形成して遊馬の体躯を包む。

「『ゲルド・ガン・デ・エン・トルテス』  
夜の女神、死の神ニユクスよ  
我が輪廻を解き放て  
我は汝の御手なれば新たな世界の扉を開けよ  
『世界門解放』」

再び旅立つ一人の男。彼の者の旅路に幸あらんことを

やはり、君は興味深い。君の活躍をのんびり観察させてもらおつ

どこからともかく、そんな言葉が聴こえた気がする……

## 別れは幾筋もの涙を湛え（後書き）

お知らせ

ただいま車校のため親戚の家に居候しているため原作が手元にない状態でして……

とりあえず今月いっぱいは『夜の女神』と『とある』の更新は停止しようと思っています。

そのかわり、『烈火の炎』を書いてみようかなあなんて考えています。

ではまたのちほど

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0483n/>

---

とある異能と死龍の末裔

2010年10月11日00時53分発行